

ピカイチ先生の  
生活経営セミナー

2018年02月

物理で考える資産運用  
(③ 不確定性原理)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com



ピカイチ先生

ピカイチ先生

検索

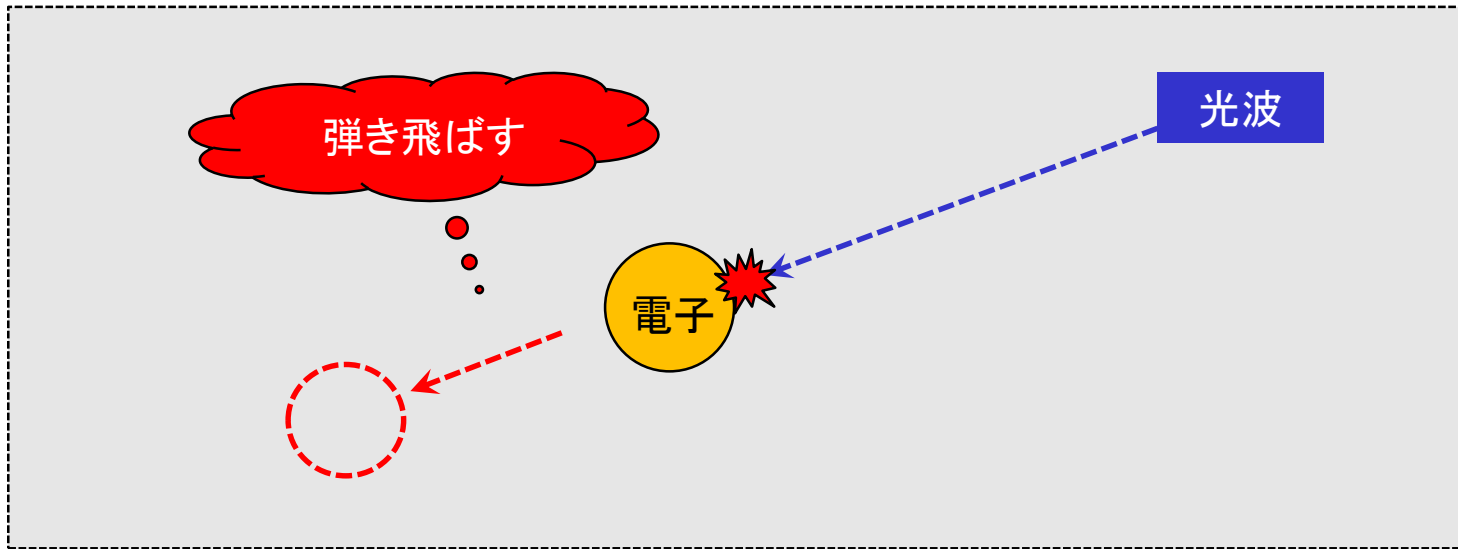
# ハイゼンベルクの原理

1926年、ドイツの物理学者であるワナー・ハイゼンベルクは、宇宙をすごいスピードで飛び回っている電子の軌道を測ることは不可能だと考えていました。光波は小さな分子の影をとらえるには大きすぎるし、それよりもはるかに短い波長を持つガンマ線は強すぎます。電子は、ガンマ線にぶつかると、コース外に弾き飛ばされてしまうのです。このように、電子を観察すること自体が、電子の動きに大きな影響を与え、実験をダメにしてしまうのです。

この結果から、彼は有名な“不確定性原理”を打ち出しました。これは、電子の速度や軌道などのように、観察しようとするればその行為自体がデータを変えてしまう恐れがあり、永遠に答えを得ることができないものがあるという考えです。

頭脳の果て(ウイン・ウエンガー、リチャード・ポー)より

# 不確定性原理



電子を観察すること自体が、  
電子の動きに大きな影響を与えてしまう



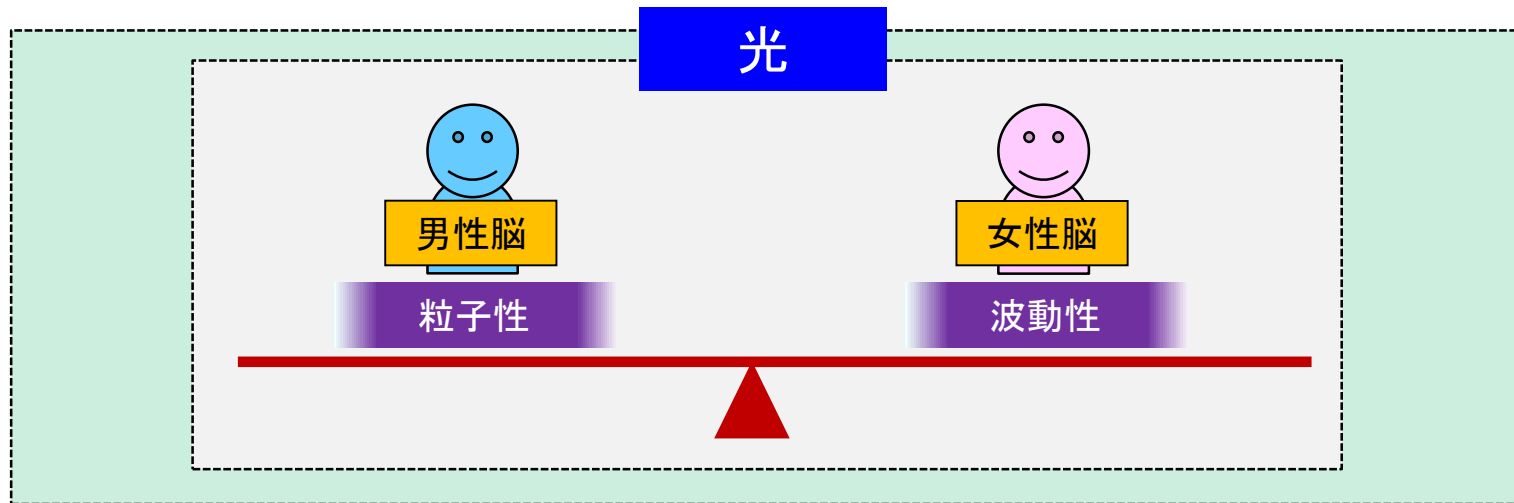
# 左脳と右脳

一般的に、左脳は言語や論理、分析の働きを、対する右脳はイメージや洞察、再認のパターンの働きをもつといわれています。しかし今日では多くの研究者たちが、実際には私たちの脳は右と左でその働きがはっきり分かれているのではなく、お互いに多くの機能を分担し合いつつ活動していることに気づいています。例えば視覚という点から考えてみても、左脳の協力なしで右脳だけで完全なイメージを形づくれないことが実験からもわかっています。にもかかわらず、依然として私たちは、この脳の対局にある部分の働きを、創造と判断とに分けて考えているのです。

言うまでもなく、アイデアを実用に移すためには判断と評価が必要です。創造と分析という心の二つの働きは、実は一つのプロセスの違った面にすぎません。これらが別々のものにとらえられているのは、水と油を混ぜることができないように同時に働かせることができないからなのです。

頭脳の果て(ウイン・ウエンガー、リチャード・ポー)より

# 粒子と波動の二面性



粒子を観測すると  
波動が見えない

観測者の立場	観測結果	相対性
静止	波動	位置を確定できない
波動	粒子	静止して見える

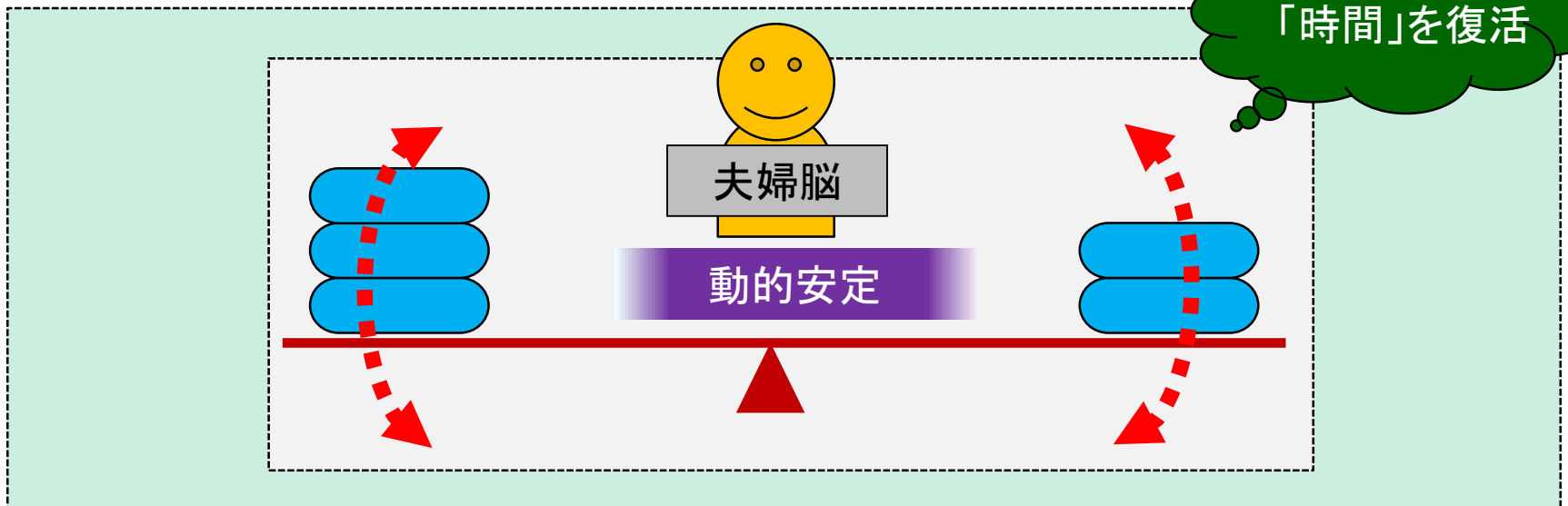
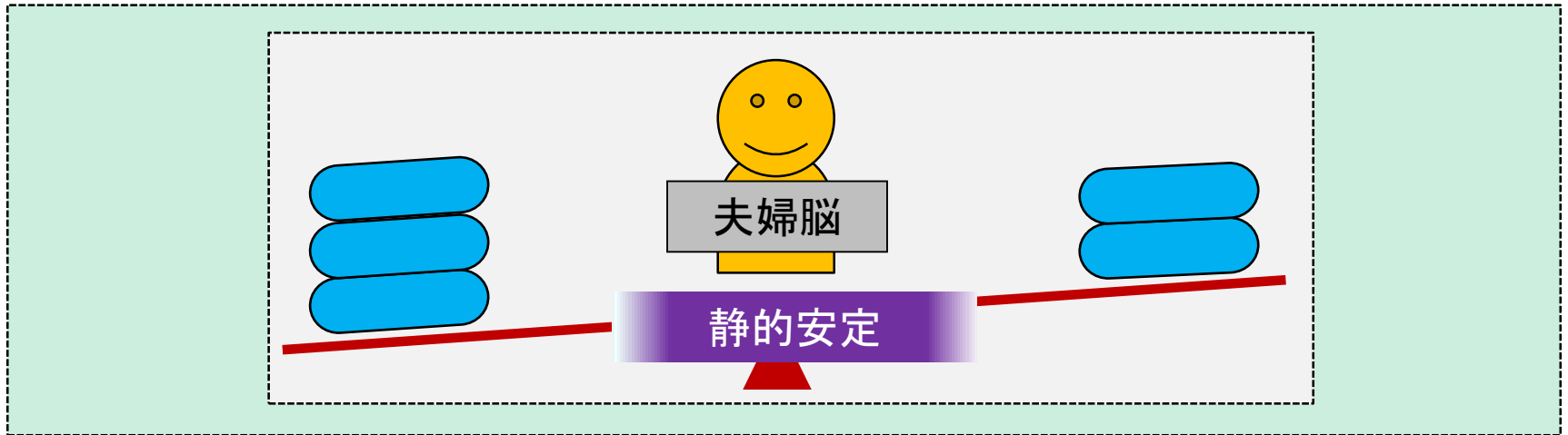
# 二本足で歩くマインド

脳は人間の体と同じように、二本の足があってこそ初めて歩けるものと言えるでしょう。つまり、右足が創造力を司る右脳で、左足が判断力を司る左脳です。両足が動かなければ移動するのはたいへんですが、かといって両足を同時に動かしても前に進むことはできません。順序よく交互に動かし、片足を動かすときはもう一方の足はその場に止まっていなければならないのです。

ブレインストーミングの発案者であるアレックス・オズボーンは、これを車の運転にたとえています。車を運転するとき、私たちがブレーキを踏む技術しか知らなかったら、車は前に進みません。しかしまた、アクセルペダルの操作だけでもたいへん危険なことになるでしょう。要するに私たちにとって必要なのは、創造と分析、すなわち右脳と左脳をバランスよく働かせるということなのです。

頭脳の果て(ウイン・ウエンガー、リチャード・ポー)より

# 二重性で考える（静的安定→動的安定）



# 時間を横に移動する

扉の横にボタンのついたコントロールパネルがあることに気づいただろう。いくつかあるボタンのほとんどはこの練習では使わないが、必要に応じてほかの機会に使用するのはいかまわぬ。

例えば、『時間を上る(進める)』というラベルのついたボタンは未来に、その下にある『時間を下る(戻す)』のボタンは過去にあなたを連れて行ってくれる。

ここでは、『時間を横に移動する』というラベルのついたボタンしか使用しない。これはあなたを、あなたの分身の一人が住んでいるパラレル地球に連れて行ってくれる。

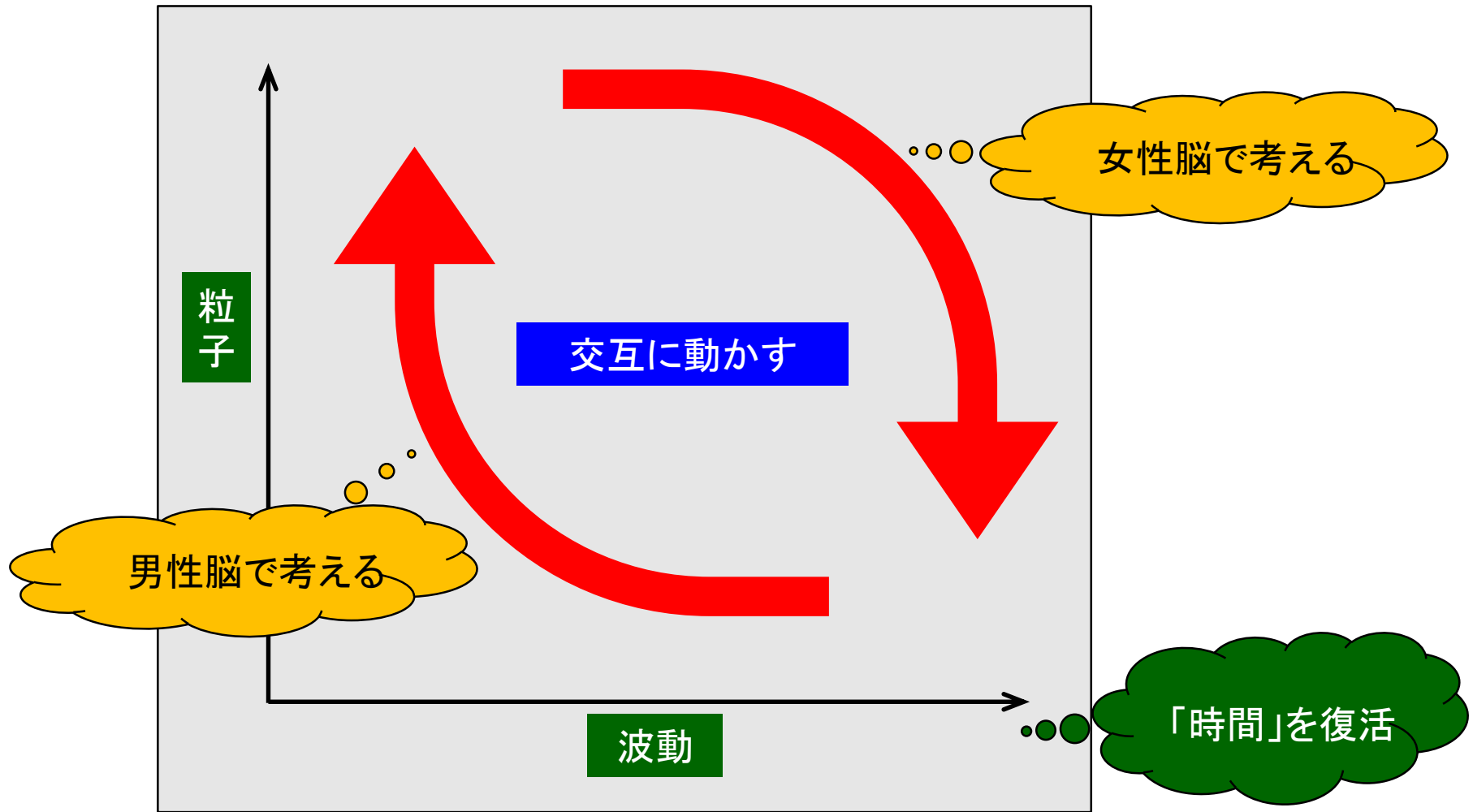
パネルのもう一方にある『空間』というボタンもあなたをパラレル宇宙に導いてくれるものだが、それにはかなりの空間を横切られなければならない。

コントロールパネルのコーナーの一つには、『解放』というラベルのついた小さなポケットがある。これをパネルからはずしてポケットに入れておこう。今までそんな例はないが、これは緊急の場合に使用する。この旅から急いで戻りたいと思ったときには、ポケットをポンと叩けば、あなたは元の世界に戻ることができるのだ。

頭脳の果て(ウイン・ウエンガー、リチャード・ポー)より



# 動的安定で考える



# 自己表現の本能

あなたもきっと、会議中に自分の意見を言いたくてウズウズしたという経験を一度や二度はおもちでしょう。こんなとき、他人がどんなに雄弁で説得力があろうと耳にはほとんど入りません。それもそのはず、私たちは今か今かと出番を待ちながら、自分の意見を頭の中で繰り返し練習しているのですから。たとえ話し終わったとしても、それを何度も振り返りながら微妙なニュアンスや言葉の一つずつチェックすることで頭の中はもういっぱい。まわりで着々と進行していく会議などただの雑音にすぎなくなります。

会議が終わったとき、誰の話を一ばんよく覚えているかといったら、ほかでもない自分自身の話なのです。なかでもあなたを最もイライラさせるのは、その会議がおもしろければおもしろいほど意見を言いたくなることで、まわりの話など耳に入らなくなることでしょう。

私たちの本能的習慣のほとんどが、チェックなしで自由気ままに活動する場合と同じように、こうした行動も不作法で自己中心的なものに見られがちです。学ぶべきところの多い自己啓発の本でも、このような行動をたしなめて、「黙って人の言うことを聞きなさい」と注意しています。

しかし残念ながら、このアドバイスは私たちの耳にはほとんどと言ってよいほど届きません。食欲や性欲と同じように、こうした自己表現の欲望はそれほど強いものなのです。

頭脳の果て(ウイン・ウエンガー、リチャード・ポー)より

# 動的安定の仕組み（フラクタル構造）

